

## 第1回将来計画策定有識者会議 議事要旨

日時：令和2年10月16日（金）午後2時から午後4時

場所：3号館2階3201教室

出席者：（委員）森迫委員、内海委員、矢島委員、綾城委員、中本委員、杉山委員、錦織委員、長島委員、伊東委員、大槻委員、坂根委員、井口委員、矢口委員、山本委員、岡本委員、西田委員  
（福知山市）渡辺市長公室長、岸本大学政策課長、井上係長、倉主事  
（事務局）内田グループマネージャー、外賀アシスタントマネージャー、荻野アシスタントマネージャー、神代

### 1. 資料

- 第1回 福知山公立大学将来計画策定有識者会議 次第
- 福知山公立大学将来計画策定有識者会議 委員名簿（資料1）
- 福知山公立大学将来計画策定有識者会議設置の趣旨（資料2）
- 第1回福知山公立大学将来計画策定有識者会議資料（福知山市）（資料3）
- 情報学部将来構想2020年10月8日（資料4）
- 大学院構想2020年10月16日（資料5）
- 福知山公立大学将来計画策定有識者会議設置要綱

### 2. 会議・議事概要

<p>(1) 開会挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 福知山公立大学井口和起学長より挨拶</li><li>● 福知山市伊東尚規副市長より挨拶</li></ul>
<p>(2) 委員自己紹介（資料1）</p>
<p>(3) 座長指名</p> <p>井口学長指名により、森迫清貴委員が座長に、座長指名により職務代理を内海康雄委員に選出。</p>
<p>(4) 話題提供</p> <p>矢島委員より『デジタル変革時代の幕開け～ウィズコロナ/ポストコロナで加速化～』の講演。</p>
<p>(5) 議事</p> <p>①福知山公立大学将来計画策定有識者会議設置趣旨について 事務局より説明。</p> <p>②大学を活かしたまちづくりの方向性について（福知山市） 福知山市より説明。</p> <p>（委員）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 2頁の目指すべき大学像として、「地域社会を支え、地域社会に支えられる大学」「地域に根差した大学」とあるが、北近畿地域から入学する学生が11%程度で、卒業後、北近畿地域に就職する学生が20%程度しかない。地域の学生が更に入学し、地域に就業してもらうための方策はあるのか。</li></ul> <p>⇒指摘の内容は、開学以来、常に言われてきた。問題の前提として、北近畿地域は京都市内や全国平均と比べても大学進学率が低い。北近畿地域内では、大学進学率40%台がずっと続いて</p>

いる。北近畿地域からの入学者の増加も大事だが、大学に進学することの意義を住民の皆様がどのように考えているかがとても大事な問題である。この地域の高等教育への理解度がどのようになっているか、経済的な生活状況がどのようなものなのかを問題の前提として考える必要がある。また、企業の中では人材不足が言われているが、学生との間でマッチングが上手くいかない状況もある。今後も考えなければならない重要かつ難しい問題であると認識している。将来構想の中では、大学としては、学部の将来や入試制度など様々なことを検討し、新しいことを試みていきたいが、一番大きな問題である高等教育に対する地域の人々の期待や要望は、現状のままではうまく解決しないのではないかとの印象を持っている。

●優遇措置や仕掛けがあってもよいのではないかと思った。

⇒設置者との検討も必要であるが、設置者が福知山公立大学に「公立」を付けた意味は、福知山市だけではなく、北近畿の自治体にも何らかの支援をしてくれるような大学になってほしいという希望もあった。設置者は奨学金制度や入学金減免制度などを整備しているが、周辺市町にも出身者が本学に進学する際に、入学金減免などの検討を頂くようお願いしているところである。

(委員)

●4頁に北近畿一円の各種団体と連携したインターンシップやフィールドワークをはじめ地域協働型実践教育研究の更なる充実とあるが、DX（デジタルトランスフォーメーション）を企業が意識する中で、大学の人材育成におけるフィールドワークはウィンウィンの関係になるのではないかと。学生も地域の企業を知ることになる。企業も問題解決の機会を得られると考える。

⇒地域協働型実践教育研究としてのインターンシップやフィールドワークは企業に就職する第一歩であると認識している。

(委員)

●入学者・卒業生・就職先の開拓は大事なところである。北近畿から集まってもらおうと、福知山市は入学金の減免や授業料の減免をしているが、北部7市町の連携会議の中でも地元の学生が入学しやすいような経済的支援を要請している。就職の関係においては、福知山市と京都府で連携してマッチング会議をしている。また、福知山市は3年生の夏休みにインターンシップに来てもらっているのも、更に広く強くやっていきたい。

### ③教育研究の充実について（福知山公立大学）

ア) 学部の将来構想について（資料4）

西田委員より説明。

イ) 大学院の設置について（資料5）

西田委員より説明。

(委員)

●情報学部は、半年で既にかかなりの成果を上げていることは評価している。三段池キャンパスの構想について、学部ができたばかりで新しい施設整備が提案されたが、小学校の廃校の活用などもあるのではないかと。オンライン化は既に実証されている。新たな施設整備の発想はどこから出てくるのかという感想である。また、ぎりぎりの人材でやっているが、構想にある入学定員や学生定員、教員数の増について、今の段階で言えるのかどうかと考える。修士課程は大賛成である。通常、理工系を作って大学院を設置していないのは考えられないため、少なくとも

修士課程は設置して、地元企業等と企画研究できる人材を送り出してもらいたい。博士課程は少し大変ではないかという感じはしている。将来構想の中で、後継者育成もあったが、もう少し考えた方がよい。

⇒三段池キャンパスは例であり、構想の段階で合意はしていない。今のキャンパスは非常に満足しているが、10年あるいは20年先のことを考えると、長期的な計画が必要と認識しており、市民と来訪者と大学が一体となったキャンパス整備が必要である。定員については、4月から現在まで情報学部にも多数依頼を頂いており、既に人手が不足している状況である。我々はこれに応えていきたいと考えている。経営の観点からも、もう少し多い方が安定すると考えており、定員増ができるのであれば頑張りたい。博士課程は各学年2人で6人程度の規模を考えている。後継者づくりについては、創り上げた地域情報学を何とか継承・発展させたいとの思いで考えている。

(委員)

- 高校側としては、大学院が設置されているどうかは、選択を考える上で非常に重要な要素となる。高校生にとっては一つの魅力になる。
- 教職課程の設置は、北部の学校にとっては大変ありがたい。高校生が進路を決めるときの選択として教職課程が取れるというのは、大きな強みとなる。ただ、教職課程の「情報」だけであれば、採用の可能性が低い。スケジュール上、「数学」を取ることができるようになるまで時間を要しているの、可能な限り早くしてもらうことで、魅力が増すのではないかと。地域経営学部でも公民の教職免許が取れ、情報の教職免許も取ることができるとなれば、採用試験の時に大きな強みとなる。
- 北部の教員は、夏休みに10年毎の教員免許更新で遠方に出かけている。京都府内の大学で、17大学くらいが免許更新の会場となっている。公立大学も認可を受けてもらえば、北部を含めて全国から先生方が来られて、公立大学の良さを実感してもらえらると思う。1年でも早くに実現をお願いしたい。

(委員)

- 教員免許についてであるが、生徒がどのような観点で進路を選ぶのかといえば、大学の教育の中身、進路や就職先等、入試の科目がある中で、卒業後の進路を考えた時に、資格が大きく影響してくることから、教職の免許は魅力のあるものだと考えている。情報の免許を持っている方を北部地域で探すことは、どこの校長先生も大変苦労されている。情報の免許を持っている先生が、2校から3校掛け持ちしているのが実態である。また、学校回りをしていると、どこの高校でも教職の免許が取れるのかと聞かれる。非常に希望が多い。教員免許が取ることができれば、地元定着にもつながるのではないかと。
  - 免許更新についても強くお願いしたい。数学の免許の更新であれば、数学の教科が必須ではあるが、選択領域も18時間程度の講習が必要となる。現状、北部の先生方は、京都市内や他府県に更新に行っている。公立大が会場になれば、選択領域もあるため、この2学部の中でかなりの選択者が出てくるのではないかと。これは京都府に限らず、兵庫県北部も含めて非常に喜ばれ、それと同時に大学を知ってもらう絶好のチャンスになるのではないかと。
- ⇒資料は情報学部としての実現の見通しを示したものである。教員組織の増強が必要であると考えているため、今後大学の中で協議し、実現できるよう進めていきたい。情報学部としてはやる気はある。大学院構想については、修士課程で学年当たり10人から20人程度の定員を想

定して策定した。現在の状況ではキャンパスを拡張することはかなり難しい。情報学部は1年生しかいない状況だがすでにスペースが不足ははじめている。4学年全て入ってくれば、どうなるのかという心配もあるため、大学院定員については控えめな数字を出しているところである。

⇒教職員体制の定員の増強はできないとの発言があったが、教職課程の問題で言えば、教職関係ではどうしても専任教員2人が必要である。2学部で考えようとするれば、人員増がない限りは、実現しにくいというのが実情である。地域経営学部の教員数は22人が設置基準であり、現在は23人となっている。この中で努力しようとしているというのが現状である。

(座長)

- 地域経営学部の将来構想は、11月5日にご提案いただく。

## (6) 意見交換

(委員)

- A市で小学生にアンケートしたところ、33%が将来出ていってしまうとの結果だった。求人はあるが、希望はしない。小学生がそのような回答をするのは、周りの人が言っているのではないか。周りの人に将来像が描けるようなものを見せていかないといけない。卒業後の生活など、小中学生にはそのような話の方が伝わる。将来どのような生活が描けるかが大事である。
- 大学院構想のプロジェクトにおいて、PBLやアントレプレナーシップなどが全体の構想の中に流れている。ただ、プロジェクトのマネジメントをどうするか点では、今は全て大学側で行うように見えてしまうが、学生に実施をさせて、学生が自立していくことが必要である。理系では、芝浦工業大学が4年かけて卒業時にマネジメント能力がつくカリキュラムを持っている。日本でもかなり進んでいると思う。アントレプレナーシップの視点では、大学卒業後、自分で稼ぐような人材を育成していかないといけない。構想の中ではそのような考え方が書かれている。既存のものでいくのはいいが、新しいものを作って、ここで活躍するのを目指されるといいと思う。プロジェクトマネジメントの視点とアントレプレナーシップの視点を散りばめて説明すると夢が実現するという言い方ができるのではないか。

(委員)

- 会社を経営していて、どういう人材が欲しいかという視点であるが、どのような人が活躍しているかと言えば、地元の人ではない。人材の多様性から考えると、域内ではなく、域外からヘッドハンティングしたような人の方が活躍している。域外から色々なバックグラウンドのある人材を入れてブレインストーミングのようなディスカッションをしていると、自由にいろいろなことを言ってくれるため、そういう人材の方が今重宝している。地元の人をいかに沢山採用して定着させるという話もあったが、多様性の観点から言えば、外から優秀な人を採用して、定着させるということも重要だと考える。

(委員)

- 中丹地域の高校卒業者は毎年2,000人で、この内1,500人が地域の外に出ていく。地域の将来に大きな懸念がある。様々な面で地域を内から支えていくという点で、大学には若者の地域定着に繋がるような高等教育機関であってほしい。教育行政的な難しさやハード面の限界、地元でない人の呼び込みの話があった。地域の若者が定着し、外部から若い人を呼び込む大学の質と量があれば、地域としてはありがたい。公立大学だけではなく、京都工芸繊維大学

福知山キャンパスや舞鶴工業高等専門学校、看護系、福祉系など様々な学校があり、こういった学校との連携の強化という方策もあるかもしれないが、若いこれからの地域を担う人材の育成の核になるような大学であってほしいと考えている。

(委員)

- 大学の地域に根差し、世界を視野に活躍するグローバルリストの育成としては、地域にいる学生には最終的には地域に残っていただきたい。産業界としては大事なことである。インターンシップも含めて活発にしていくことを考えていただきたいと思う。また、企業側の努力も重要であって、大学や学生にもしっかり企業がPRしていくことも商工会議所としてもしっかりやっていきたい。商工会議所も活用していただきたい。

(委員)

- 大学の構想は大学院だと思うが、スキーム図(資料5:3/6頁)の課題のところ、まず課題を見つけること自体が難しいのではないかと考える。どのような課題があるのかが分かれば研究もある程度進んだといえる。ロボットや自動化など世の中の産業にデジタルを入れる視点が入っている方がよいのではないかと考える。福知山公立大学だけでは難しい場合は、京都工芸繊維大学などとの連携が出てくるのではないかと考える。

(座長)

- 北部地域の人口減少や産業の衰退は以前から言われているが、京丹後市の総合計画委員となった際の意見の中で、親子さんが帰って来なくてよいと言っているという意見があり、子どもの頃からの言うことが非常に大事だと改めて思った。地元愛がしっかりあるということは、決してずっと居続けるというわけではない。この地域が好きで、いずれ何かのチャンスがあれば、帰ってきて貢献したいと思えるような人を育てていかなければいけない。
- 京都工芸繊維大学は、福知山キャンパスを作った。京都市など都会に一度は出てもらわないと、地元のことが分からないこともある。今年の卒業生の中で、北部地域に就職した学生がいる。習ったことや多様性の中で、人と接したことが良さを分からせることになっている。
- 大学進学率は北部地域の進学率は京都府の中では問題であるが、今は地域衰退・人口減少であり、日本におけるある意味経験したことのない、危機的状態に緩やかに入ってきている。一番大事なことは、目先のことだけではなく、教育や人材育成に力を入れることである。大学だけに託されたことではない。福知山市の資料の中で、大学の構想の部分がなかったが、福知山市が大学の進学率を上げるということは掲げられていなかった。北部地域で進学率を上げることは、多様性を生む非常に重要な要素となる。世界に対しても同じで、これからグローバルをやらなくて、日本や地域のことだけをやっていくわけにはいかない。このようなことも含めて教育だと考えてほしい。

次回開催

日時：令和2年11月5日(木) 14時～16時 場所：福知山公立大学3号館2階3201教室